

Eric Carle: Art, Books, and the Caterpillar



絵本のむこうに
なにがみえる？

Artwork by Eric Carle. Collection of the Eric and Barbara Carle Foundation.
™&©Penguin Random House LLC.
Eric Carle: Art, Books, and the Caterpillar is organized by
The Eric Carle Museum of Picture Book Art, Amherst, Massachusetts, United States

M0+
MUSEUM CONTEMPORARY TOKYO
OF ART
東京都現代美術館

● はじめに



アメリカを代表する絵本作家エリック・カール（1929-2021）の回顧展を開催します。ページごとに紙のサイズが変わり、あおむしの食べた跡が穴で表現されている絵本『はらぺこあおむし』は、現在でも世界中で愛されています。技術的に難しい印刷・製本は、アメリカでの初版時、実は日本の会社が印刷・製本を引き受け、世に出ることになりました。そこから7年、忘れがたい美しい翻訳によって、日本語版が出版されます。本展は『はらぺこあおむし』日本語版50周年を記念して、アメリカ・マサチューセッツ州にあるエリック・カール絵本美術館とともに開催します。

『はらぺこあおむし』（1969年）や『パパ、お月さまとって!』（1986年）、『10このちいさなおもちゃのあひる』（2005年）など27冊の絵本の原画にあわせ、最初の構想段階で作られるダミーブック、コラージュに使用する素材（色や模様をつけた紙）など、約180点を展示します。

絵本は、こども一人ひとりの手に直接届けるために作られた小さなアートです。その宝物のような絵本を生み出すには、美しい原画だけではなく、それを絵本という形に落とし込むブックデザインの技術が必要になります。色鮮やかで光あふれる美しい原画は、自然豊かな環境でのびのびと育った幼年時代の思い出、そしてデザインの技術は、グラフィックデザイナーとして活躍してきた経験によるものでしょう。本展は、絵本作家エリック・カールのデザイナーとしての側面にも光をあてます。カールの絵本を今まさに楽しんでいるこどもだけではなく、デザインに関心のある大人にも、改めてこの絵本作家の魅力を紹介したいと思います。

2026 4.25(土)-7.26(日)

東京都現代美術館 企画展示室 1F/3F

開館時間：10:00-18:00（展示室入場は閉館の30分前まで）

休館日：月曜日（5月4日と7月20日をのぞく）、5月7日、7月21日

主催：東京都現代美術館、エリック・カール絵本美術館、読売新聞社

協力：日本航空、偕成社、コスモマーチャンダイズィング

観覧料：一般 2,300円／大学生・専門学校生・65歳以上 1,600円／
中高生 1,000円／小学生以下無料

○本展チケットでMOTコレクションもご覧いただけます。○小学生以下のお客様は保護者の同伴が必要です。○チケットはオンラインでの事前の購入をおすすめします。

東京都現代美術館

〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1

TEL：03-5245-4111（代表）

展覧会公式サイト：https://ericcarle2026-27.jp

✕ @ericcarle26_27 @ ericcarle26_27

*開催内容は都合により変更になる場合がございます。

● 展覧会タイトルにこめた意味



日本語サブタイトル

「はじまりは、はらぺこあおむし」

日本語サブタイトル「はじまりは、はらぺこあおむし」には、3つの意味をこめています。絵本『はらぺこあおむし』は、エリック・カールがはじめて自分で文章も書いた絵本であり、こどもが最初に出会う絵本の一つでもあり、その後の絵本作家たちに大きな影響を与えた本でもあります。『はらぺこあおむし』日本語版50周年を記念する本展では、もちろん展示も『はらぺこあおむし』の原画からはじまります。

英語サブタイトル

「Art, Books, and the Caterpillar」

エリック・カールは、小さいこどもに向けた、言葉や文字に出会う絵本、いわゆる「ABCの本」を数多く作っています。そこで、英語のサブタイトルは頭文字がABCとなるように「Art, Books, and the Caterpillar」としました。「Art」は色鮮やかな絵本原画の美しさ、「Books」はブックデザインの工夫、そして「Caterpillar」は『はらぺこあおむし』に代表されるキャラクターや物語の魅力を示しています。

絵本の原画展は、「Art」に焦点をあてることがほとんどですが、絵本は本来、一人ひとりの手に直接届けることを目的としてデザインされたアートです。そのため、グラフィックデザイナーとしての腕の見せ所である「Books」の面白さをご紹介します。

● プロフィール

エリック・カール

Eric Carle (1929-2021)

1929年6月25日、アメリカ・ニューヨーク州にてドイツからの移民である両親のもとに生まれる。6歳の頃、両親と共にドイツに移住するが、規律の厳しい学校生活になじめず、ナチス政権における戦時でもあり、灰色の少年時代を送る。シュトゥットガルト州立芸術アカデミーでグラフィックデザインを学び、1952年ニューヨークに戻ってから、デザイナーやアートディレクターとして活躍する。

1967年、作家で教育者のビル・マーティン・Jrの絵本『くまさん くまさん なに みてるの?』にイラストレーションを描いたことから、絵本制作に関心を持つようになり、絵本作家となる。ページの形や開き方に工夫を凝らし、光や音などのしかけを加えた「遊べる本であり、読めるおもちゃ」を目指し、生涯で約90冊もの絵本を生み出した。2002年、マサチューセッツ州アマーストにアメリカ初の絵本専門美術館「エリック・カール絵本美術館」開館。2021年5月23日、マサチューセッツ州ノーサンプトンにて91歳で没。



幼い頃、家から離れて学校に行くというのは、私にとって大変な変化でした。だから、小さいこどものための本を作るというのは、とても意味があります。私の本がこどもたちにとって、家の中の世界から教室の中の世界へのかけはしとなることを願っています。——エリック・カール

こどもはみんな個性的で、それぞれ違います。だから私は「こどもたち」という言葉を使いたくありません。むしろ「こども、こども、こども」という言葉を使いたいです。私は一人ひとりのこどものために本を書いていると思っています。そして、そのこどもは私、私の中のこどもなのです。——エリック・カール



Images©The Eric Carle Museum of Picture Book Art, Inc.

エリック・カール絵本美術館

2002年にエリック・カールとバーバラ・カール夫妻によって設立された「エリック・カール絵本美術館(The Eric Carle Museum of Picture Book Art)」は、絵本芸術を世界に広める先駆的な存在です。マサチューセッツ州アマーストの7.5エーカー(約3万平方メートル)の敷地に位置する同館は、『はらぺこあおむし』で知られるエリック・カールをはじめ、300人以上の絵本作家による2万点以上の作品を収蔵しています。展覧会、教育、プログラム、そして創作活動を通じてコレクションの魅力を発信しており、絵本作家や作家、さらには地元や全米、そして世界中のアートを愛するコミュニティにとって不可欠な拠点となっています。同館の使命は、絵本芸術の価値を高め、アートへの愛と創作への意欲を育むことです。開館から20年以上が経過し、これまでに100万人以上の来館者を迎えました。さらに、世界各地で開催されている巡回展を通じて、400万人以上の人々が同館のコレクションを楽しんでいます。

● 見どころ



① 『はらぺこあおむし』全ページが集結！

2026年に日本語版50周年を迎え、今なお世界中で愛される『はらぺこあおむし』。全ページの原画のほか、『はらぺこあおむし』誕生のきっかけとなったダミーブック「みみずのウィリーのいっしゅうかん」、世界中で65言語以上に翻訳されている他言語の『はらぺこあおむし』も紹介し、『はらぺこあおむし』を深掘りします。

② 日本初公開！『いちばんのなかよしさん』の原画を展示

エリック・カールの絵本には、カール自身の思い出による物語が多くあります。アメリカに生まれた彼は、6歳の時に両親の故郷であるドイツに移住します。仲良しの友達に会えなくなってしまった悲しい経験は、川を泳いで渡り、野を越え山を越えて友達に会いにいく『いちばんのなかよしさん』という絵本になりました。

③ グラフィックデザイナーとしてのエリック・カール

エリック・カールはドイツでグラフィックデザインを学び、卒業後はファッション誌のアートディレクターになりました。1952年にニューヨークへ戻り、ニューヨーク・タイムズ紙のデザイナーとなった後、広告代理店のアートディレクター、そしてフリーランスのデザイナーとして活躍します。グラフィックデザイナー時代のポスター作品や、日本では出版されていない、画風の違う絵本なども展示します。

④ 国内展示過去最多！ダミーブックが12点

エリック・カールは絵本を作る時に、まず、物語の流れや構図、デザインのアイデアを練るために「ダミーブック」という絵コンテのようなものを作ります。最終版とは違う物語や異なる構図もあり、試行錯誤のプロセスがよく分かります。本展では、これまで日本で開催されたエリック・カール展では最も多い、12点のダミーブックを展示します。

⑤ 絵本コーナーや特設ショップも！

エリック・カールの絵本の魅力は、原画の美しさだけではなく、ページをめくりたくなるしかけや、めくった時の驚きなどにもあります。そのブックデザインを体験していただくために、展示室とは別に、自由に絵本を閲覧できるコーナーを設けます。特設ショップには会場限定の展覧会オリジナルグッズも多数用意しています。展覧会の思い出をお持ち帰りください。

現在日本では入手できませんが、この絵本は最終ページを開くとほたるのおしりが光るしかけがついていました。エリック・カールの絵本は、穴あきやポップアップ、電池で光ったり音が鳴ったりするしかけなど、子どもを喜ばせるアイデアが豊富です。今では珍しくないしかけでも当時は革新的であり、しかも物語と連動しているのが、カールの絵本の優れた点であるといえます。

この章では、エリック・カールが絵本作家になるまでの人生をたどります。

1929年にアメリカに生まれたカールは、6歳の時に両親の故郷であるドイツに移住します。友人との別れや、言語の違い。そして明るく自由に過ごしていたアメリカでの幼児期から、戦時に向けて街が色彩を失い、学校教育も規律に厳しいドイツへの移住は、彼の少年時代に暗い影を落としました。

そんな中、彼の美術の才能を見いだした学校の美術の先生がこっそり見せてくれたのは、当時「退廃芸術」として弾圧されていたピカソやクレー、マティスなどの絵の複製でした。その色彩の鮮やかさに衝撃をうけた経験が、彼のアーティストとしての原点となりました。

その後、シュトゥットガルト州立芸術アカデミーに入学し、グラフィックデザインを学びます。1952年にニューヨークに戻り、当時グラフィックデザイナーとして活躍していたレオ・レオーニとの出会いから、デザイナーとして順調にキャリアを積んでいきます。しかし『くまさん くまさん なに みてるの?』(1967年)がきっかけとなり、絵本作りに情熱を見いだすようになるのです。

カールの絵本は、物語にあわせて、時間の経過や、数の概念、物の名前などをやさしくこどもに伝えます。家を離れて学校に通い始めるということは、こどもにとって大きな変化であり、時に痛みをとまいません。

彼は一人ひとりのこどもに寄り添い、家の世界から学校の世界をつなぐ「かけはし」としての絵本を描き続けました。



「ひみつを ひそひそ
はなすように になったら」

エリック・カール『いちばんのなかよしさん』2013年
Collection of the Eric and Barbara Carle Foundation.
© 2013 Penguin Random House LLC.

6歳の時にアメリカから両親の故郷であるドイツに移住したエリック・カール。仲の良い友達から離れて、言葉も英語からドイツ語に変わり、生活環境も大きく変わり…という中で、毎日「いつ帰るの?」と両親に訊ねていたそうです。カールは23歳までアメリカに帰ることはありませんでしたが、絵本の中で主人公は山を越え川を渡って、友達を探しにいきます。そしてついに会えた友達と結婚式をするというお話です。



エリック・カール『ブレッツェルのはじまり』1995年版

Collection of the Eric and Barbara Carle Foundation. © 1972, 1995 Penguin Random House LLC.

「つぎの あさには、あたらしい はつめいひんが
みせに ずらりと ならびました。」

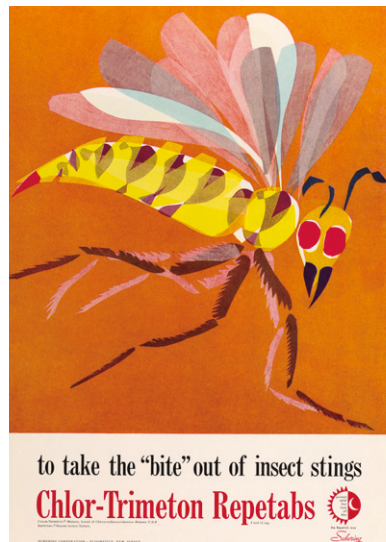
王様おかかえの腕のいいパン職人ウォルターは、ある日パン作りに失敗してしまいます。それを食べて怒った王様が、「朝日が三つさしてくるパンを作れ。できなければ追放」と言います。追い詰められたウォルターが偶然作り出したのがブレッツェルでした。それはたちまち大人気のパンになりました。ドイツで大勢の親戚に囲まれて暮らし、美味しいお菓子をたくさん作ってもらっていた思い出が詰まった絵本で、カールが祖母から聞いたドイツの民話が元になっています。



ビル・マーティン・Jr文『くまん くまん なに みてるの?』1992年版 表紙と裏表紙
Collection of the Eric and Barbara Carle Foundation © 1967, 1992 Penguin Random House LLC.

動物たちに「何見てるの?」と質問を繰り返す、ことばのリズムとカラフルな動物の絵を楽しむ絵本です。作家・教育者のビル・マーティン・Jrの詩は、シンプルでリズムを重視し、カールの描く動物は、目線で読者を次のページへと誘導します。文字ではなく、リズムとビジュアルで読ませる本を生みだした経験が、カールの絵本作家としての第一歩となりました。それまでも児童書の挿絵などを担当していたカールですが、この本が実質的な絵本デビューとされています。

初版は1967年ですが、何度か改訂して原画を描き直しており、展示されるのは1992年版です。偕成社から出版されている日本語版は1983年版の原画を使用しているため、本展では日本語版とは異なるイラストの原画を見ることができます。



エリック・カール 広告ポスター
「クロルトリメトン抗ヒスタミン剤」1960-66年頃
Collection of the Eric and Barbara Carle Foundation
© Penguin Random House LLC.

エリック・カールとビル・マーティン・Jrとの出会いは、マーティン・Jrがたまたま目にした医薬品のポスターがきっかけでした。カールは医薬品専門の広告代理店のアートディレクターだった時に、このアレルギーの薬のポスターをデザインしました。蜂毒アレルギーにはハチ、甲殻類アレルギーにはロブスター、日光アレルギーには太陽と、アレルギー発症原因が、大きくコラージュで描かれています。その後フリーランスのデザイナー、イラストレーターとして活躍するようになったカールに、マーティン・Jrが児童書のイラストを依頼し、後の絵本『くまん くまん なに みてるの?』に始まる、長年の協働につながりました。



エリック・カール『パパ、お月さまとって!』1986年
Collection of the Eric and Barbara Carle Foundation. © 1986 Penguin Random House LLC.

「お月さまが ちょうどよい おおきさになると、
パパは、お月さまを もって、」

月と遊びたい娘のために、パパが長いはしごを昇っていき、月をとってくる幻想的な物語です。ページが上下や左右に大きく広がるしかげが、はしこの長さや月の大きさを際立てています。

これはカールが絵本作家になる前、3歳の娘サースティンのために手作りの絵本が元になっています。そこから25年経ち、大人になった娘から「憂鬱な時にこの絵本が元気づけてくれた」と言われ、改めてアイデアを練り直し、世界中のこどもに届ける絵本として出版されました。

レオ・レオーニとの親交

絵本『あおくときいろちゃん』(1959年)、『スイミー』(1963年)などで知られる絵本作家レオ・レオーニ(1910-1999)も、実はグラフィックデザイナーとして活躍していました。1952年にエリック・カールがニューヨークに移り住んで来た時、レオーニは有名な雑誌「フォーチュン」のアートディレクターを務め、数々の賞を受賞する華やかなデザイナーでした。カールが公衆電話の電話帳でレオーニの連絡先を調べ、自分のデザインをプレゼンしに行くと、レオーニはすぐに仕事を紹介してくれました。以来、二人の親交は続きます。

レオーニは1959年にはじめての絵本『あおくときいろちゃん』を出版し、カールにも絵本の仕事を勧めていたそうです。カールは当時、全く絵本には興味がなかったようですが、レオーニの絵本の中での一番のお気に入り、買いしやくとりむしが主人公の『ひとあしひとあし』(1960年)、『はらぺこあおむし』と同じく長い虫ですね。

エリック・カールの絵本の魅力は、絵の美しさや物語だけではなく、読者が絵本の世界に入り込むための「しかけ」にあります。小さい読者のために、「遊べる本でもあり、読めるおもちゃでもある絵本」を目指していたのです。そのため、グラフィックデザイナーとしての経験は、絵本作りに大いに役立ちました。

『たんじょうびのふしぎながみ』（1971年）は、丸い大きな穴が開いていたり、階段状になっていたりするページの形自体が、プレゼントを見つけるための不思議な手紙を読み解くヒントです。『ごちゃまぜカメレオン』（1984年）は、こどもたちのリクエストに応じてごちゃまぜの動物を描く遊びが元になっています。ページの端にタブ（見出し）がついていて、それぞれのページでカメレオンが何の動物になろうとしたかが分かります。『とうさんはタツノオトシゴ』（2004年）では、海藻だけが透明シートに印刷されており、それをめくって、海藻に擬態している魚を探します。『できるかな？ あたまからつまさきまで』（1997年）は、一緒に体を動かして楽しみながら読む本です。その他にも、さまざまな遊べる工夫がされた絵本をご覧ください。フリップブックやポップアップなど、現在では一般的になったしかけも、カールが使用した当時はまだ珍しく、とても喜ばれました。



エリック・カール『とうさんはタツノオトシゴ』2004年
Collection of the Eric and Barbara Carle Foundation. © 2004 Penguin Random House LLC.

「ティラピアくんは こたえられませんでした。
ティラピアくんの くちは たまごで いっぱいだったのです。」

オスがお腹の袋の中で卵を育てるタツノオトシゴのお父さんが主人公です。海の中をさまよって、口の中で卵を守るティラピアや、頭にひっかけて卵を運ぶコモリウオなど、いろいろな方法で子育てをしている魚たちに出会います。無事にタツノオトシゴの赤ちゃんたちが生まれると、愛情を伝え自立を促す、素敵なお父さんです。海藻に擬態したり、岩の後ろに隠れたりしている魚の生態を伝えるため、海藻や岩を印刷した透明シートの層を重ね、めくって魚を見つけるというギミックが用意されています。



「ゆっくりのんびり おっとり と ナマケモノくん めがさめる」

エリック・カール絵本美術館の開館準備のため、多忙を極めたカールが制作した絵本です。熱帯雨林に暮らす動物たちに「なぜそんなにゆっくりなのか？」と問われ、ナマケモノは「それがぼくのやりかたさ。ゆっくりのんびり おっとりがすきなさ」と答えます。スローダウンしたいカールの気持ちがあらわれています。

エリック・カール『ゆっくりがいっぱい!』2002年
Collection of the Eric and Barbara Carle Foundation.
© 2002 Penguin Random House LLC.

展覧会の締めくくりとなる章では、エリック・カールと日本との関わりを紹介します。カールの絵本は、1970年に『1, 2, 3 どうぶつえんへ』(1968年)で、はじめて日本に紹介されました。その後『はらぺこあおむし』で人気を博したカールは、1985年の絵本原画展にあわせて初来日し、講演などを積極的に行いました。日本を愛した彼は、その後も2017年までに何度も来日しています。

日本での体験のうち、とりわけ大きな影響を彼に与えたのは、たくさんの絵本専門の美術館を見て回ったことでした。それはやがて、2002年に開館するエリック・カール絵本美術館に結実します。「絵本」を子どもがはじめて出会うアートと位置づけ、世界中の絵本作家の作品を収集する、アメリカで最初の絵本美術館となりました。続くコーナーでは、彼のアトリエでの様子を伝えます。最後の絵本となった『ありえない!』(2015年)は、一見して愉快的ナンセンス絵本で

すが、ありえない世界を思い描くことができる人間の想像力へのラブレターとも思えます。アトリエにそのまま残されている、コラージュに使用する薄紙や画材、制作する時に着用していたスモックや靴からは、2021年に亡くなる直前まで作品を作っていたというアーティストの気配が伝わってくるようです。一人ひとりのこどものために、絵本を届けたい。その願いが形になったのは、このカールのアトリエなのです。



エリック・カール 手彩色の薄紙
Collection of the Eric and Barbara Carle Foundation © Penguin Random House LLC.

カールは、絵にあわせて紙に色を塗るのではなく、あらかじめ様々に色付けした紙を作っておき、絵を描くときに紙を選ぶのを楽しんでいました。筆だけではなく、スポンジやカーペットの切れ端、靴の裏なども使って、手の動きにまかせて自由に模様をつけていきます。使い終わった後の切れ端も大切にしておき、また別の作品に使用しました。



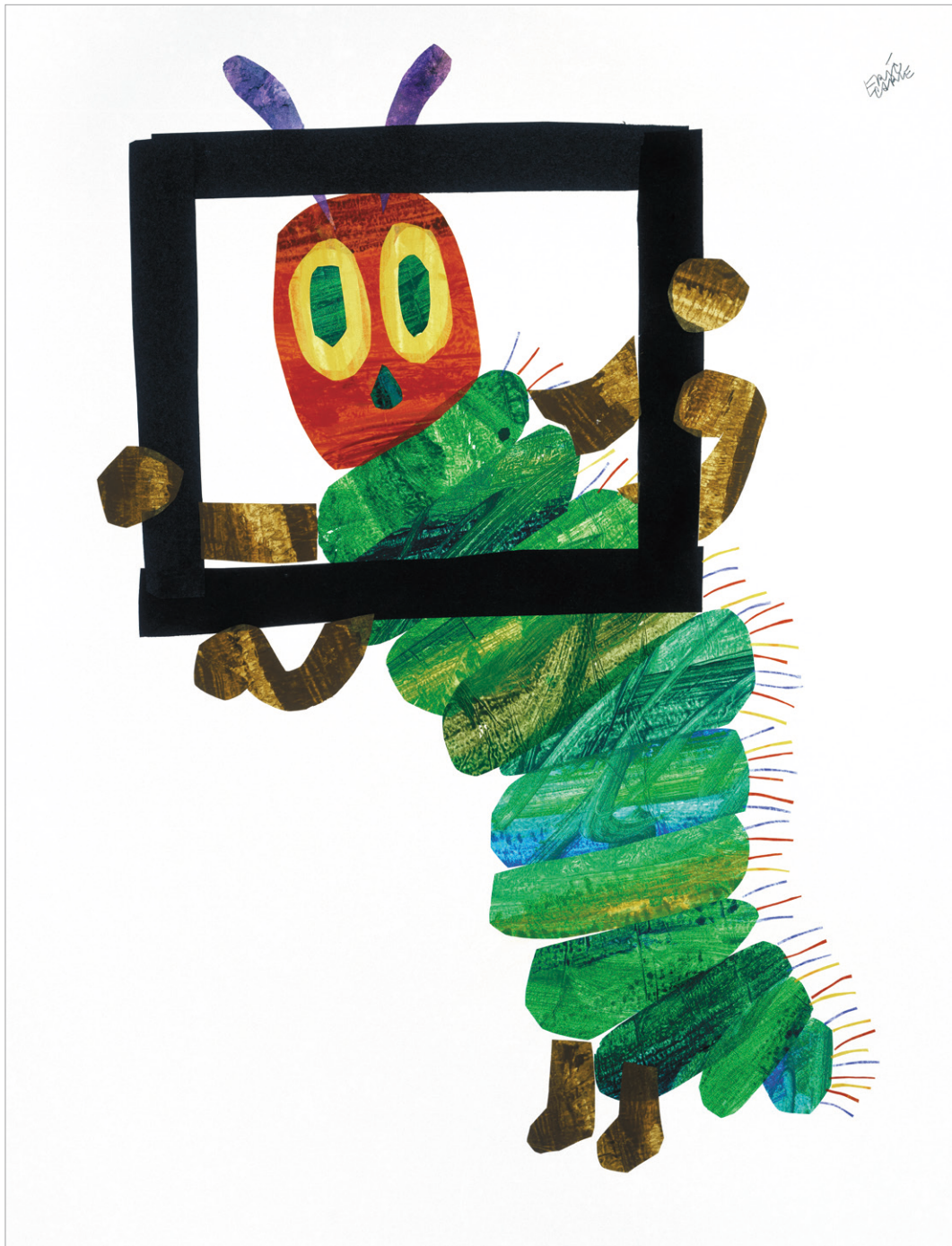
エリック・カール 箸をもったあおむし 2017年
© 2017 Penguin Random House LLC.



エリック・カール『10このちいさなおもちゃのあひる』2005年
Collection of the Eric and Barbara Carle Foundation. © 2005 Penguin Random House LLC.

「とつぜん あらしが どっどど
なみが うねって ざんざざん」

嵐で海に流出してしまった約30,000個のお風呂用おもちゃのあひるが、11年を経て、アメリカやイギリスの海岸にいくつか流れ着いたという新聞記事を読んで思いついた物語です。10匹のあひるがばらばらに流されていき、最後のあひるは家族(?)に出会います。絵本にはあひるが鳴くしかけがついているバージョンもあります。



エリック・カール フレームをもったあおむし

(エリック・カール絵本美術館開館時の寄付を募るPRポスター) 2002年

Collection of the Eric and Barbara Carle Foundation. © 2002 Penguin Random House LLC.

展示会のキービジュアルとして使用しているこのあおむしは、エリック・カール絵本美術館開館時に作成されたポスターの原画です。手にフレームを持って、こちらをのぞいています。日本のテレビ局が制作したドキュメンタリー番組のために行われたワークショップで、カールが参加者に持たせたフレームが元になっていると考えられます。これを通して見ると、葉っぱや雲、道路のひびわれなど、日常のありふれたものでも、その色や質感を、まるで額縁で囲まれた美術作品のように味わうこと

ができるのです。この絵には、アメリカで最初の絵本美術館を開館するにあたり、絵本を通じてこの世界の美しさを見つけてほしいというカールの願いが込められているのではないかと、本展日本側企画チームは考えました。フレームをもってこちらを見ているあおむしは、色鮮やかで豊かな世界を見ているカールそのものなのかもしれません。

作品はすべてエリック・カール絵本美術館蔵

All art by Eric Carle. Collection of the Eric and Barbara Carle Foundation.
©Penguin Random House LLC.